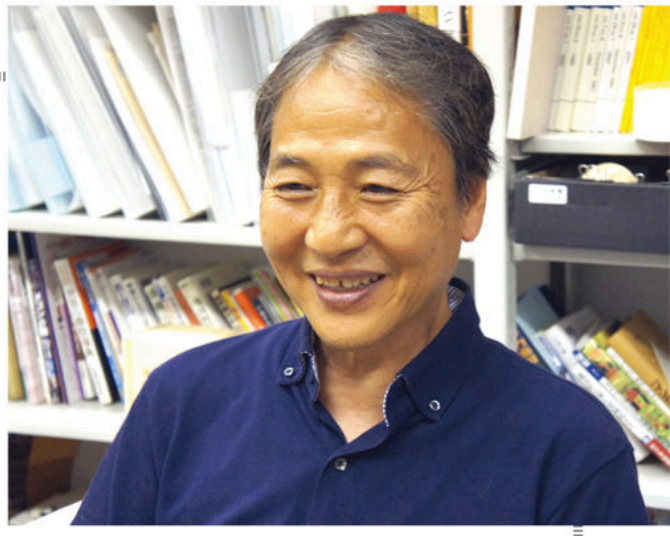
Interview

探検家・医師・武蔵野美術大学教授

関野吉晴さん



南米からアフリカへ人類拡散の行程を遡る〈グレートジャーニー〉を自身の脚力と腕力だけを頼りに、10年がかりで踏破。2011年に〈海のグレートジャーニー〉で壮大な旅を終了させた。探検家で医師、そして武蔵野美術大学教授である関野吉晴さん(66歳)を訪ねた。

旅の原点はアマゾン

関野さんの研究室はまるで図書室のよう。天井まで届く三方の本棚に、夥しい数の蔵書が並ぶ。2002年に武蔵野美術大学（文化人類学）の教授に着任。一橋大学の学生であった頃から、横浜市立大学医学部時代を除いては、ずっと多摩地域に住んでいる。もっとも、20代からの20年間で、アマゾンに滞在した日数だけでも、のべ3千日に上るという。生まれ、育ちは東京の墨田区。勉強よりも外で遊ぶことが好きな少年だった。

「その頃の日本は経済至上主義の競争社会でした。僕は偏差値教育のはしりで、自分を思い切り、違うところに放り込んでみたくて、とにかくどこかへ行ってみたいと思っていましたね」

そのどこかが南米アマゾンだった。一橋大学在学中に探検部を立ち上げ、アマゾン川全域を下った。アマゾンの密林で生きる先住民、マチゲンガやヤノマミの人びとと暮らしを共にし、文明社会と全く異なった、自然に寄り添い暮らす彼らに強く惹かれた。

「彼らは森と川のことを知り尽くした植物生態学者なんです。ナイフ一本あれば、森の中で生きていける。ゆったりとしてつつましい。貧しい感じがしない。先住民でもマチゲンガとヤノマミとは感情表現が全く違うのですが、媚びたところがないのが好きですね」

彼らを調査や取材の対象としたくなかった。あくまでも友人でいるために、居候に過ぎない自分が、彼らの役に立つことは何か。それは医者になることではないか、と思いつき、医学部へ入り直した、というのが凄い。先住民のことを話す関野さんは実に楽しそうだ。マチゲンガの家族とは40年以上の付き合いが続いている。

日本人とアマゾンの人びとはよく似ていて、ルーツは同じアジア系。彼らがどこから来て、アマゾンまでどのような旅をしてきたのか…このような問いかけがきっかけで、1993年、グレートジャーニーを逆ルートで辿る、南米からアフリカまで約5万300キロの旅が始まったのだった。関野さんのすべての旅の原点はアマゾンにある。

縄文号とパクール号（1日に10キロも進まない日もあった）

左）船上の関野さん
左中）マンダール人クルー
左下）巨樹を手製のオノで伐る
下）10/24上映の映画チラシ

砂鉄から鉄器をつくる

日本にやってきた人びとの足跡を辿る旅〈新グレートジャーニー〉を開始したのが2004年。シベリアから北海道に至る北方ルート、ヒマラヤを越え中国、朝鮮半島を経て対馬までの南方ルートを旅し、残ったのが

日本列島にやってきた人びとの足跡を辿る・・・

手づくりカヌーで4700キロ航海

ドキュメンタリー映画上映

東南アジアからの海のルートだった。関野さんは途方もない計画にたどり着く―マチゲンガやヤノマミの人びとが自然を利用して、何でも作ってしまうように、古代のカヌーを再現したい。そして、舟を造るための鉄の工具も砂鉄から作る。舟を完成させたらインドネシアから沖縄・石垣島まで、エンジンは使わず、太古の人びとがしたように、島影と星だけを頼りに航海する―という〈海のグレートジャーニー〉である。

「50年後も生きている若者たちと、ものづくりの現場で新たな〝気づき〟を共有したい」と教え子たちに参加を呼びかけた。名づけて「黒潮カヌープロジェクト」。九十九里浜で若者100人が3日がかりで120キロもの砂鉄を集め、たたら製鉄で鉄をつくる。そのために3トンの木を伐り、300キロの炭を焼いた。職人の手を借りて鍛錬し、加工して、オノ、ナタ、ノミ、チョウナができあがった。自然からの素材で工具ができた感動と達成感。それは若者にとってはもちろんのこと、関野さんにとっても大発見であった。

合計80メートルものシュロの縄も、保存食のドングリクッキー等も、班ごとに素材を探し、山間の古老を訪ね手仕事を手伝い、若者たちは試行錯誤した。そこには現代のIT社会とは真逆の、数えきれない出会いと気づきがあった。

『縄文号とパクール号の航海』の上映

〝船の博物館〟と呼ばれるインドネシア・スラウェシ島で、ようやく探しあてた巨樹は直径1・8メートル、高さ54メートル。携行した手づくり工具で切り出し、少数民族マンダール人の手を借り、丸木舟「縄文号」とその地の伝統的な構造帆船「パクール号」の2艘を造った。帆はヤシの若葉を織る伝統技法に出合ってつくった。マンダール人の「自然との約束事」に寄り添い、7か月をかけての造船だった。

クルーは吉野隊長をはじめとする日本人4人とマンダール人の漁師たち6人。「マンダール人のクルー選びが最も大変でした、皆働き盛りで家族が反対するのでね」。吉野さんが〝実験的異文化共生空間〟と呼ぶ2艘が並走する航海のドキュメントはぜひ、10月にルネこだいらで上映される映画を見てほしい。中断しつつ3年をかけた4700キロの旅。単なる冒険の記録にとどまらず、人間ドラマが展開される。

ジョークを飛ばす、関野スマイルについ引き込まれてしまう。「学生にも『先生はズルイ、その笑顔にごまかされるから』と言われます（笑）」。聞くところによると学生たちからは「原住民スマイル」と呼ばれているとか。

旅をしばしば織物に例える。縦糸は移動、横糸は寄り道。織られた布が映像や活字となって表現される。

「人はそれを成果や業績と言いますが、僕にとっての布は自分のものの見方、宇宙観、価値観につながってくるものです」これこそ関野さんが一番大切にしていることなのかもしれない。

■映画

「縄文号とパクール号の航海」

10月24日（土）19時～（開場18:40）

ルネこだいら中ホール

前売り600円（学生500円）販売はルネこだいらなど　当日800円

小学生以下無料（託児要相談）

■写真展

「縄文号とパクール号の航海」

撮影：佐藤洋平（航海に参加した若者）

9月15日（火）～30日（水）　無料

（初日15時から、最終日15時まで）

小平市中央公民館プロムナード

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

いずれも　主催：ちいさな虫や草やいきものたちを支える会

平成27年度市民活動支援公募事業

（問）リー　☎042（347）0153

E-mail　satoko.lee@gmail.com